安楽寺寺報

聞光

第７３号
報恩講号
2014/11/1

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

追悼号

信楽峻麿前住職往生

信楽晃仁

九月二六日、安楽寺第四世住職信楽峻麿が、お浄土に帰らせていただきました。生前中は門信徒の皆様に大変お世話になり、ありがとうございました。

前住職は昭和三十二年より平成十六年まで五十年近く安楽寺の住職を務め、本堂改築、庫裡改築、鐘楼経蔵新築、そしてひかり幼稚園の理事長も兼ね、幼稚園の園舎も立て替え、安楽寺境内地を整えて、現在の安楽寺・ひかり幼稚園の形を作ってくれました。

また安楽寺だけではなく、生家である東広島の教円寺の住職も勤めながら、京都では龍谷大学の教授から学長にまでなり、本願寺では監正局長（宗門内の最高裁の裁判長）そしてその後は、東京の仏教伝道協会の理事長を歴任し、大変な激務をこなしてきた前住職でありました。このような大役は、ひとえに、正しい仏教の教えを皆さんに伝えたいという思いで、身を粉にして東奔西走した末のことであります。安楽寺でも毎年元旦会、お盆法座、報恩講法要を勤め、聖典講座も開催しました。遠近各地よりたくさんの方々にお参りしていただくことを、本当によろこんでおりました。

そうした前住職でしたが、その人生は、大変苦労の多い人生だったです。

みんなの“信楽先生”は僕にとっては普通のおじいちゃんで、一緒に暮らしていて、毎日お仏壇に向かってお念仏をしている、ただのおじいちゃんでした。それがアメリカでの講演を聞いて、また色んな方と話しているのを見て、今までにはない衝撃を受けたことを今でも覚えています。

そして今、おじいちゃんの部屋にあるお仏壇にあまりお念仏しに行ってなかった僕も、今では毎日おじいちゃんの部屋で手を合わせてお念仏をするようになりました。

おじいちゃんは僕に直接「お念仏をしなさい」と言うことは全くなく、毎日お念仏をいいながら家でも講演会でも“信心とは何か？”と言うことを身をもって教えてくれていたのだと思います。僕もこれから信心とは何か？ということについて考えていけたらと思います。

一枚の写真

信楽　慧

今回は祖父の追悼号となりましたので、京都にある家の祖父の部屋を写してみました。

僕が大学に入ってから、京都の家で二年間、二人で暮らしていたので、たくさん思い出があります。一緒にご飯食べるときは「足りるんか？足りるんか？」と気にしてくれたり、夜遅く帰ってきた時は「疲れたの～」といいながら玄関を開けにきてくれたり、家のどこにも思い出があり、今でも声が聞こえてくるようで、ふとした時に涙が出てきてしまいます。

今一番心に残っていることは、祖父がアメリカの講演会で話していた「信心とは、何かあった時、例えばお説教や法事の時にだけお念仏をするのではなく、毎日毎日お仏壇に手を合わせてお念仏する、その積み重ねである。」ということです。

思い出

葬儀　H26.9.29

第71回聖典講座　H26.5.25

H26.1.1元旦会

H25.12.26

安楽寺マンガ通信

その２６　信楽めぐみ作

九月二六日おじいちゃんがなくなりました。

二日間続いた通夜、葬儀にはたくさんの方が来てくださいました。

おじいちゃんが最後に言っていた、

「いい御縁だった」

というのを実感しました。

葬儀に来てくださった方々ありがとうございました。これからも安楽寺を宜しくお願いします。

編集後記

この聞光は平成四年から始まり、二二年間前住職がずっと書いてくれていました。初めて前住職の文章のない聞光となり淋しく心細く思います。

前住職のぬけた穴が大きすぎて、家族総動員で聞光作成に当たりましたが、穴を埋めることが出来ません。どうにかこのような形で追悼号とし、発行という事にさせて頂きます。ただ家族に原稿を提出してもらうと、その原稿の中に、前住職のお育てがはっきりと届いていることが見え、有難く少し元気を頂きました。

どうぞ皆様、今後とも寺族一同をお育て下さい。　合掌

たといいます。小学生の時に生母を亡くし、その後継母（ままはは）が家庭に入ったそうです。幼くして母を亡くした寂しさの上に、様々な継母との軋轢（あつれき）もあり、苦悩したようです。また少年期は、身体が弱く、二十歳までは生きられないだろうと言われ、家の者は不憫（ふびん）に思い「勉強なぞせず、楽に生きろ」と言われたそうです。「あのときにもう少し勉強しろと言われていたら、もう少しえらくなれたのに」と笑っていました。その後は戦争にかり出され、北海道に渡ったそうですが、その軍隊でも、身体が弱くて使いものにならぬ、と追い出されたようです。しかし本土に帰ろうにも青函連絡船はなく、帰るにも帰られなかったようです。その後終戦になり、帰って龍谷大学に入りなおし、卒業後は平安高校の先生になりました。そしてその後、龍谷大学の教授となったわけです。

　ところがここでも問題が起きます。父が広島で学んできた仏教、親鸞聖人のお念仏の教えを京都で話すと、それは異安心（いあんじん）（正当な浄土真宗の教えではない）だと本山や先輩からたかれたそうです。父の学んできた浄土真宗は石泉学派（せきせんがくは）と言い、全国に知れわたる安芸門徒を育てた教えです。本山は空華学派（くうげがくは）といい、石泉の教えとは違ったものでした。本願寺はその空華の教えにあわぬものを異端とし、異安心として排除しようとしました。親鸞聖人の時代も、念仏禁制となり、念仏を申したものが打ち首になり、親鸞聖人も罪人として越後に流されたという歴史がありました。それと同じことを体制側は繰り返すのです。念仏申すことがなぜ罪になるのかという宗祖の思いと同じく、前住職は念仏申すことこそが浄土真宗にとって最も大切なのだということを訴えましたが、それが本山の義とは相容れなかったようです。その後幾度となく本山から呼び出され詮議をうけますが、前住職は臆することなく、自らが信じ、親鸞さまがお伝えくださった本当のお念仏の教えを、膨大な経典や資料を元に、きちっと体系立てて確立していきました。その蔵書の多さは、京都の家が本の重みで傾いたほどです。またその成果がたくさんの著書となり、英語、ドイツ語にも翻訳されて世界にも広がっています。本山から詮議されていた前住職が、本山の最高学府龍谷大学の学長になり、宗門（本山）の最高裁の裁判長にもあたる監正局長にもなったという事は、何が正しかったのかを物語っています。

　前住職の人生は、波瀾万丈の人生で苦しい、悲しい、寂しい場面も多かった人生だと思います。その辛い人生を全力で生ききった前住職が最後に残してくれたのは「良いご縁じゃった。なまんだぶつ、なまんだぶつ。良い人生じゃった。ありがとう、ありがとう。」と言う言葉でした。まさかその次の日には全く話せなくなるとは想像も出来ない程しっかりとした言葉でした。

　辛い人生だったかもしれませんが、だからつまらなかったとは言いませんでした。「良いご縁じゃった。良い人生じゃった」とこの人生を讃（たた）えて、お礼を言ってお浄土へ帰って行きました。これはやはりお念仏に出遇えたものが残せる言葉ではないかと思います。

　前住職の部屋には「この世の出来事は何事も何事も念仏の助縁とここころうべきなり」と自らが書いた色紙が掛けられています。苦しいことも悲しいことも、寂しいことも全てお念仏のご縁なのだと言います。そのお念仏に本当に出遇えた時、全ての出来事を肯定する事の出来る心が育つと教えてくれました。

　本当にすばらしい、前住職であり、やさしい父でありました。私こそ本当によいご縁をいただきました。遺りました寺族は、前住職のような力はございませんので、これからの安楽寺・ひかり幼稚園を思うとき、前住職も心配だったろうと思います。皆様にもご心配をおかけいたしますが、今後私たちも前住職の遺志を受け継ぎ、できる限り、がんばって参ります。門信徒の皆様の今まで以上のご支援をお願いいたします。

坊守の記

信楽徳子

　父が亡くなってから、早くも五七日を迎えました。ご縁のあった皆様から、たくさんのお手紙をいただきました。その中には、父との思い出話しが書かれてあったり、私の知らない在りし日の父の姿を教えていただいたり、また師を失った寂しさが綴られていたり、拝読させていただいているうちに、皆様の熱い思いに涙がこぼれることです。

　皆様からのあたたかいお手紙を拝読させてもらっていると、ふと部屋に飾っていた佐久間顕一先生の絵の言葉がうかんできました。それは次のような言葉です。

善き友を持ち
善き仲間と共にあることは、
聖なる道のすべてである。

　この額は、父の部屋に長い間飾ってあった額です。この額の絵と言葉が好きで、私が結婚前に父から譲りうけて、部屋に飾っていたものです。この言葉の深さを身にしみて感じています。私のこれからの人生もどうぞ、法の友と共にお念仏申して、手を合わせていきたいと思っております。

　皆様のお導きを宜しくお願いいたします。

暮らしの中の仏教語

『往生』（おうじょう）

「あの一件には往生したよ」とか「往生際が悪い」とか「立ち往生」と“往生”という言葉は、どうしようもなくて困ったときや、物事がゆきづまった時など、あまり良い意味には使われていないようです。

　しかし往生とは、現世を去って、仏の世界に生まれることなのです。極楽浄土に往って生まれるから往生といいます。ですから往生即成仏。往生即涅槃という語句もあるのです。

　特に浄土宗や浄土真宗の信者にとっては“極楽浄土に往って生まれる”ということは最大の願望であり、最高におめでたいことなのです。

　ある地域では、お葬式の時に「おめでとうございます。」と言う挨拶をしたといいます。それは「この度のご往生おめでとうございます。」という事です。また三重県の方では、お葬式に赤飯を炊くそうです。しかし同時に、涙が出る程、辛い辛い、からし汁もでるそうです。（本当は）おめでたいこと（赤飯）だけれども、凡夫の私たちには悲しみ（涙）である（からし汁）という事です。

　この度、前住職が往生いたしました。往生即成仏と本人から聞いています。前住職は仏となった者はすぐに還（かえ）ってくるのだとも常々申しておりました。

　どうか私たちお念仏に出遇ったものは、「死んだ」のではなく「往生」したといえる、人生を送りたいものです。そのためにもどうぞ安楽寺にお参り下さい。

安楽寺法要案内

十一月	報恩講	日時　１１月１５日(土) 講師　佐伯区　正覚寺　瀧渕良孝師 講題　往生とは （ご案内の通り1日になっています） 婦人会手作りのお斎があります。
十二月	成道会	日時　１２月１３日(土)朝席・昼席 講師　阿賀　宝徳寺　平原弘史師 講題　仏教とは
一月	御正忌	日時　1月１１日(日)朝席・昼席 講師　住職自勤
二月	涅槃会	日時　2月１４日(土)朝席・昼席 講師　音戸　順覚寺　大草一之師

来年の法要のテーマにつきましては、年間カレンダーにてお知らせいたします。